



# 復刻『環境破壊』

復刻『環境破壊』編集委員会 編

第1回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-024-0  
解題:中村紀一

第2回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-089-9  
解題:井下田猛 中村紀一

第3回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-144-5  
解題:井下田猛 中村紀一

第4回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-241-1  
解題:井下田猛 中村紀一

第5回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-272-5  
解題:井下田猛 中村紀一 半澤廣志

第6回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-375-3  
解題:中村紀一 半澤廣志

第7回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-423-1  
解題:中村紀一 半澤廣志

第8回配本●全4巻B5判+別冊解題  
定価(本体98,000円+税) ISBN978-4-86369-465-1  
解題:中村紀一 半澤廣志



すいれん舎

●第1回配本 収録『環境破壊』一覧(一部)

号	タイトル
1970年6月	国際シンポジウムと日本の公害 都留重人
1970年6月	水質汚濁防止の諸問題 南部洋一
1970年6月	人権尊重の公害対策を要求 十七日之助
1970年7月	水俣病を告発する会のアピール 水俣病を告発する会/安保体制と公害—住民運動の当面の課題 宮本憲一
1970年7月	70年代の公害と革新勢力 宇井純
1970年7月	革新市政以後の富士市 甲田寿彦
1970年7月	白杵を白い町にしないでください 白杵市を愛する会
1970年8月	食品公害—発生源の徹底的究明を 庄司光
1970年8月	安中公害と加害企業の刑事責任 高田新太郎
1970年8月	自然循環を破壊する農業—農業問題の正しい位置づけ 福島要一
1970年8月	そのうちみんな毒地獄 石牟礼道子
1970年9月	住民運動は何をめざすか 宮崎省吾
1970年9月	(労働者のとりくみ)名古屋南部地区労の公害調査 草川昭三
1970年10月	公害条例改正の直接請求に成功—富山県議会開会
1970年11月	たたかいの原点に立つ 本田啓吉
1970年11月	原子力発電所の設置に反対する—柏崎の原発反対運動 若林一郎
1970年12月	公害対策「横浜方式」の再検討 鳴海正泰
1970年12月	住民運動の「神奈川方式」—注目される連絡組織 編集部
1970年12月	地域開発と生活環境—川崎市の実例を中心として 津脇喜代男
1970年12月	東電火力発電所反対運動の勝利 公害から銚子を守る市民の会
1970年12月	石油企業の進出を阻止—徳島県那賀川町村のたたかい
1971年1月	環境破壊制圧に力を結集しよう 公害問題研究会代表 飛鳥田一雄
1971年1月	公害闘争・70年をふりかえる—全国の住民運動が提起したもの
1971年2月	(座談会)野党共闘と公害問題—公害国会をふりかえって—
1971年3月	遺体から高濃度のカドミウム—腎臓から2万2千PPm
1971年3月	「日本鋼管公害反対千人委員会」発足—公害絶滅の一株運動
1971年3月	活発な`住民パワー、—地方公害白書を発表 自治省
1971年4月	公害と秦野ビジョン 渡辺精一
1971年4月	三菱電機福山との公害防止協定 市民は`住民サイド、と歓迎
1971年4月	ヘドロを富士川へ棄てても恥じぬこと 甲田寿彦
1971年5月	70年代沖縄の開発と公害 吉村功
1971年5月	特集・沖縄と公害
1971年6月	「食品」は公害の被害者である 田中寿美子
1971年6月	深刻化する農業汚染 松島松翠
1971年6月	公害は犯罪だ!—東京電力を告発する 電力公害研究会
1971年7月	労働組合の公害闘争 井下田猛
1971年7月	一株運動をすすめている団体 公害問題研究会
1971年7月	北海道公害地図 渡部真也・福地保馬

●第2回配本 収録『環境破壊』一覧(一部)

号	タイトル
1971年8月	(今月の公害問題)腹の立つ話 宇井純
1971年8月	水質汚濁とその対策 佐藤昌之
1971年9月	何を「科学的」というのか?—スターングラス警告に関するコメント 全国原子力科学技術者連合
1971年9月	三菱原子炉大宮設置反対訴訟—第3回全国公害研究集会弁護団報告集
1971年11月	現像公害とその問題点 井上博文
1971年12月	最近における騒音公害の特質と問題点 助川信彦
1972年1月	(今月の公害問題)公害問題と住民運動—71年をふりかえって72年を考える— 宮本憲一
1972年1月	(特集・住民運動の課題と展望)

号	タイトル
1972年1月	(パネル・ディスカッション)革新自治体と公害対策・住民運動 横山桂次・宮崎省吾・後藤国利・小山仁示・大塩敏樹・宮本憲一
1972年2月	(新全総に基づく地域開発の現状と問題点)
1972年4月	サリドマイドによる環境破壊制圧のために—あざらしっ子の父として— 佐藤巖 / 全国サリドマイド訴訟統一原告団声明
1972年4月	連帯意識がささえる手厚い救援—西欧三国のサリドマイド児を訪ねて— 松井やより
1972年5月	—大阪の道路公害反対運動—小山仁示
1972年5月	環境汚染による健康崩壊の危機(下)—水銀農業その他の農業汚染による次代への悪影響を中心に—白木博次
1972年6月	(今月の公害問題)足尾鋳毒事件をふりかえる—田中正造翁の思い出のなかから— 荒畑寒村
1972年6月	(特集・足尾鋳毒事件から70年)
1972年6月	「鋳毒問題と暴動事件」から学ぶもの—今日の公害問題の教訓として— 長瀬勇
1972年7月	対策なき汚染物質PCB 宇井純
1972年8月	琵琶湖の水質状況と将来予測—生物学的立場から— 根来健一郎
1972年9月	(今月の公害問題)鹿島開発からポスト新全総へ—日本列島改造論批判— 大崎正治
1972年9月	買収と強権による用地取得の実態—行政と企業の鹿島侵略をあばく— 浜田弘
1972年10月	「米本判決」と公害四日市—かわらない企業の体質— 沢井余志郎
1972年10月	森永ミルク中毒被害者恒久的救済に関する(抜すい) 森永ミルク中毒のこどもを守る会
1972年11月	「新大隈開発計画」反対闘争の記録—柏原地区住民の闘い— 高根仁
1972年12月	(今月の公害問題)太陽と住民 日照権をめぐる住民の情念 柏木暁

●第3回配本 収録『環境破壊』一覧(一部)

発行年月日	タイトル	著者名
1973年1月	石油パイプラインと住民運動—埋設阻止に住民運動は不可欠	今野国輔
1973年2月	《今月の公害問題》`石油たん白、への疑問	田中寿美子
1973年3月	伊達「環境権訴訟」の意義—住民運動・世論の支持がカギ	淡路剛久
1973年3月	わが国における<環境権>	桜井保之助
	海外資料 原子力発電所の安全性論争(上)	ダニエル・フォード他 訳・剣持一己
1973年4月	《今月の公害問題》石油たん白は冰山の一角	野村かつ子
1973年4月	石油たん白と行政争訟の展望—食品・薬品公害予防措置として	保木本一郎
	海外資料 原子力発電所の安全性論争(下)	ダニエル・フォード他 訳・剣持一己
1973年5月	`尾瀬、—保護と破壊の歴史—	関根潤
1973年5月	繰り返される`カネミ事件、—技術面から原因をさぐる—	剣持一己
	いわゆる「生活不快」公害に関する賠償問題—日立セメント粉塵事件について—	宮川勝之
1973年6月	火電反対運動ひとり歩きのために	松下竜一
	広田湾開発と住民運動	河野通義
1973年7月	核燃料再処理工場・原発に抗して 原子力施設過密地域住民の闘い	寺沢迪雄
	《海外資料》原子力発電所が一般住民に及ぼす危険性について	ラルフ・ネーダー 訳・橋元信一
1973年8月	道路公害告発の戦列への参加を—高速道路反対の意義—	小山仁示
	賠償主義か原状回復主義か—公害健康被害補償法案—	宮川勝之
1973年11月	公害企業の存立を許すな—`鍵、は住民パワーの結集—	田尻宗昭

発行年月日	タイトル	著者名
1973年12月	多奈川第二火力発電所 建設計画の問題点	前川義治
1974年3月	《瀕死のびわ湖をめぐって》	谷覚
	①琵琶湖の破壊は今生の地獄 ②琵琶湖汚染調査結果から	星野芳郎
1974年4月	《北の兄貴》に我らはつづく	松下竜一
1974年5月	高空空港拡散問題にめぐって—現状レポート—	駒井慎一郎
	高浜入干拓への警告 —許せない霞ヶ浦の荒廃—	山口竹夫 恵美子
	国道・車・騒音—自動車騒音の現状と問題—	中村紀一
1974年6月	医療と健康権—憲法25条の具体的表現形態として 精神科医の眼に映る公害問題	下山瑛二 福井東一

#### ●第4回配本 収録「環境破壊」一覧(一部)

発行年月日	タイトル	備考
1974年7月	多奈川第二発電所建設問題をこう考える —汚染をすすめる環境管轄計画—	宮本憲一
1974年8月	住民運動の連合と共闘—東京中心主義の脱却を—	仲井富
1974年9月	<座談会>原発を拒否する論理	熊野市井内浦原発設置反対同盟
	伊方に原発なんていらぬ	川口寛之
	美浜原発危険と今後の住民運動について	吉村清
1974年10月	足尾鉾毒と取組んで30年—調停への道—	板橋明治
1974年12月	住民参加への模索—住民運動に対する自治体のあり方— 線引の思想を排す—公害行政のあり方—	横山桂次 宮崎省吾
1975年 1・2月合併号	エデンの海が消える	安里清信
	沖縄における海洋博反対闘争と教育労働者の課題	照屋盛行
1975年3月	集団訴訟とは—奪われたものをとりかえす法	野村かつ子
1975年4月	なんで事故が多いんやろ	全石油ゼネラル石油精製労組堺支部
1975年5月	三菱石油水島製油所タンク事故原因調査中間報告・付属資料	
1975年6月	石の上にも5年	仲井富・助川信彦・渡辺文学
	『環境破壊』誌全60号の証言 —切り拓かれる住民雑誌の新地平—	井下田猛
	きびしい現実の壁 玄海原発と住民の沈黙	芦川照江 渡辺鋭気
1975年7月	わが内なる水俣—水俣移住後の三年半	砂田明・仲井富・渡辺文学
	未認定患者の症例から 豊前環境権運動の3つの柱 —裁判、テント小屋、住民へのアプローチ—	緒方淳一郎 梶原得三郎
1975年8月	<われわれは原子力と共存できるか> —公害問題研究会発足五周年記念研究会報告	
	エネルギー戦略を斬る! —政治路線の選択としてのエネルギー問題—	星野芳郎
1975年9月	75反原発運動 —「反原連」からの「ひとりの会」まで	編集部
	住民にとって「公共、公共性、とはなにか」	内山卓郎
1975年10月	反原発全国集会(京都)報告—許容量ゼロ=原発廃止めざして 反原発全国集会へのメッセージ	編集部 武谷三男
1975年11月	このままでは不知火の海は死滅する 有明海諫早湾の埋立てをめぐって	山下弘文
	企業に対し市民の入浜権を主張する「市民の会」 全国レベルの反原発運動について「うみなり」	
	公害根絶の資金石としての6価クロム事件 —初心忘れず公害に挑む—	田尻宗昭

#### ●第5回配本 収録「環境破壊」一覧(一部)

発行年月日	タイトル	著者名
1976年 1・2月合併号	民俗学と入浜権—マレビトの海	高桑守史
	入浜権と明神の海—絶望を抵抗の背景として	松下竜一
1976年3月	<緑林館つうしん>世界初の釣り竿デモ	仲井富
1976年4月	<公共性>論議の諸前提	中村紀一
	寅さんの生きざまと公共性	内山卓郎
	環境権裁判にみる北電の公共性	伊達裁判に勝ってもらおう会乙三
	(2)インディアンポイント原発安全検査担当官が危険を告発し辞職 (3)ブラウンス・フェリー火災事故調査で防災計画ゼロが判明	
1976年5月	市民の歴史を記録する初の試み 「住民図書館」開設にあたって	丸山尚
1976年6月	危険なものを追放するのは消費者の権利だ 消費者運動にとって合成洗剤とは	岩下誠徳
1976年7月	特集・住民運動と女性解放 横溢した女性のエネルギー—古い観念を解きほぐした住民運動	芦川照江
	主婦と職業と反公害と 住民運動と女性解放	中村文江
	<座談会>女と男体制と住民運動 電力会社はどのように儲けてきたか—その資本蓄積の実態	司会・中島通子
1976年9月	景勝地を破壊し、住民を無視するハツ場ダム計画 もう水を送ってはならない	豊田嘉雄
	消費者運動と刑法改正—“内部告発”を阻む漏罪新設	竹内直一
1976年11月	資料公開・住民拒否権設定こそ先決 開発前提の「むつ小川環境影響評価」	海野明昇
1976年12月	特集・入浜権—'76KOBET提言 民俗学よりみた常民と海浜のかかわり	谷川健一
	海外における海岸保護行政と法律	木原啓吉
	日照権運動の新段階 —武蔵野事件と建基法改正をこえて—	楠本安雄
1977年1・2月	<現代文明考>どうぞデンキを止めなければ止めてください—東電と主婦との“小さな”闘い— アメリカの薬害	田村洋子 松下一成
1977年3月	特集・エネルギーと食糧 石油づけ食糧生産をどう克服するか	室田武
1977年4月	特集・三里塚「廃港」宣言 闘争を運動に、運動を闘争に	前田俊彦
1977年5月	特集・反火力—渥美の住民運動	
1977年6月	特集・新たな公害の元凶—地盤凝固剤 地下公害から生命と水を守る住民運動	

#### ●第6回配本 収録「環境破壊」一覧(一部)

発行年月日	タイトル	著者名
1977年7月	特集・伊達パイプライン裁判	
1977年9月	鏡川ダム・集団訴訟	
	世界のエネルギーと住民運動 西ドイツ原発の工事中止ほぼ確定ほか	
1977年10月	世界のエネルギーと住民運動(フランス)高速増殖炉反対大行進ほか	
	ハツ場ダム反対闘争から	
1977年11月	第3次全国総合開発計画を批判する 分散という名の集中—三全総のねらうもの—	大崎正治
	(連載)世界のエネルギーと住民運動 核廃物はごめんだ、米各州で規制立法ほか	
1978年1・2月	伊達環境権訴訟の意義	中村睦男

発行年月日	タイトル	著者名
1978年3月	特集・流域下水道シンポジウムより 《講演》流域下水道をめぐる問題点	宇井純
1978年4月	省エネルギーへの取り組み(米)	野村かつ子
1978年6月	嫌煙権と環境 タバコ公害、公衆衛生行政に位置づけよ	仲井富 沖本美紀子
1978年7月	決定的に欠けていた農業問題の視点 やむにやまれぬ住民の入浜権運動	小川国彦 高崎裕士
1978年8月	挫折した原発計画(豊北・紀勢)	編集部
1978年10月	変ぼうするアメリカの市民運動	野村かつ子
1978年11月	“公共”の地域侵略と住民の連合 “公共性”に抗してなお闘いは続く 《対談》新貨物線との12年間	仲井富 宮崎省吾 八木貞太郎、 仲井富
1979年3月	リコールと地方自治	森下降蔵
1979年4月	米国の原子力発電所事故を斬る 反煙運動20年	松岡信夫 佐々木忠正
1979年6月	特集・誤った原子力選択 全米に拡がる“反原発運動”	仲井富
1979年7月	<資料>合成洗剤の安全性等に関する質問主意書 ／政府答弁書	
1979年8月	スリーマイル島の事故現場に立って 公害戦争の幕引き—田尻宗昭氏左遷 毛里田地区足尾鉍毒調停「敗北説」へ反論する	小野周 斉藤曉 長瀬欣男
1979年10月	都市再開発に名をかりた河川瀆しの治水行政を衝く	伊佐山芳郎
1979年11月	日比谷公園の環境破壊に関する都市計画的考察 講座「生きものとなつたもの」第三回 プタ肉—ムシ 肉、それから	内田雄造 高松修
1979年12月	びわ湖につづけ!合成洗剤追放運動	

### ●第7回配本 収録『環境破壊』一覧(一部)

発行年月日	タイトル	著者名
1980年1・2月	80年代を生きぬくために	助川信彦
1980年3月	特集・開発より保護を —見過ごせぬ日高中央横断道路計画	
1980年4月	特集・第2回全国住民闘争連帯総決起集会	
1980年5月	特集・嫌煙訴訟	
1980年7・8月	市民派議員に聞く・きき手 仲井富 書評 住民運動に関する文献目録	編集部 丸山尚
1980年10月	新しい局面をむかえた志布志の闘い	
1980年11月	京都市“空きかん”条例 伊達火力判決と住民運動 それでも歴史は前進する	仲井富 松下竜一
1981年1・2月	レポート『2000年の地球』と住民運動	
1981年3月	80年代の環境政策と56年度予算案 福井県三国町から 石油備蓄基地に反対する —生活と海と健康を守るために—	石油備蓄を 考える会
1981年5月	LPG基地、誘致撤回 愛媛県明浜町 大きかった住民のこえ	編集部
1981年6月	フェニックス計画に反対する声明・要望書等	
1981年7・8月	伊達火力発電所パイプライン反対闘争 —消防法許可取消訴訟を軸に—	林善之
1981年9月	環境行政の原点を語る	大石武一
1981年10月	第4回入浜権シンポジウム ポートアイランドならびにポートピアを批判する声明	

発行年月日	タイトル	著者名
1981年12月	エネルギー政策の転換を求める住民運動全国集会 から	
1982年1・2月	原子力発電のコストを探る	仲井富
1982年3月	連載(一)横浜新貨物線反対運動あとがき	宮崎省吾
1982年3月	住民図書館だより(1)“民権100年”と住民図書館	丸山尚
1982年4月	松枯れ黙示—提唱“私たち流”によって「誤・松枯れ 防除法(被害対策法)」と闘う—	
1982年6月	原発の“経済性”を根本的に疑う(2)バグエンド費用 からみた“経済性”の実態	地域開発問題研究所 会エネルギー部会
1982年7・8月 合併号	第12回全国自然保護大会決議集	
1982年9月	原子力船「むつ」12年間の航跡 〔海外情報II〕韓国の原発問題	林田秀夫
1982年10月	特集・除草剤MO(水田農薬)の禁止を 三西化学にはもう操業させない 日消連専売公社を追及	中南元 河内ハツエ

### ●第8回配本 収録『環境破壊』一覧(一部)

発行年月日	タイトル	著者名
1983年1月	ナショナルトラスト推進 環境庁の責任転嫁 —本来国自身で保護すべきもの—	高崎裕士
1983年2月	原子力利用の全面禁止へ	久慈力
1983年3月	ルポ 窪川原発10年戦争	田中一美
1983年8月	特集・びわ湖の生態系破壊を告発する	
1983年9月	エネルギー長期見通しの虚実	宇治田一也
1983年10月	入浜権—世界と日本	高崎裕士
1984年1月	【緊急レポート】北海道の自然保護行政はどこへ行く のか 【特集・住民図書館】住民図書館の自立と再生に向 けて 住民図書館の大きな使命	松田忠徳 丸山尚 浪江虔
1984年3月	特集●「新石垣空港」建設阻止闘争 悠久の琉球の巖存 —白保の海とくらしに賦活される記	砂田明
1984年4月	特集・残せ織田が浜	
1984年6・7月	特集・農の世界から公害を問う	
1984年8月	特集②小樽運河の再生を! 十万市民の十年の願い	蜂山富美
1984年9月	下流=水盗りの実情報告 上流=ダム計画に抵抗する	松倉源造 後藤米治
1984年10月	特集 職場のたばこ公害を考える 全国禁煙・嫌 煙運動連絡協議会9・24シンポジウム	
1985年1月	第三世界から問われる日本の消費者運動	野村かつ子
1985年2月	特集・公害問題100年史I (明治時代から昭和45年まで)	
1985年5・6月	<新連載>現代環境政策論	井下田猛
1985年7月	<資料>原発に依存しない社会を —日本社会党の中期エネルギー政策から—	日本社会党 政策審議会
1985年8月	全国自然保護大会・琵琶湖大会報告	井手敏彦、 辻田啓志、 山崎圭
1985年9月	自然失えば精神の危機招く(記念講演要旨)	谷川健一
1985年11・12月	小田急高架建設反対運動	
1986年1月	<特集>「原子炉等規制法」の改悪を許すな 核の ゴミが野ばなしになる(講演)	高木仁三郎
1986年11月	特集 PCB焼却	
1986年12月	終刊の弁	助川信彦

## 1 著名な研究者の論文を収録

宇井純、田尻宗昭、星野芳郎、宮本憲一など  
著名な研究者による環境問題の論文を収録。

## 2 公害事件現場からの貴重なリポートを掲載

伊方原発、美浜原発をはじめ沖縄CTS建設、琵琶湖汚染や  
高浜入干拓など公害事件現場からの貴重なリポートを掲載。

## 3 住民運動の当事者による歴史的な証言を多数収録

熊野市井内浦原発設置反対同盟、刈羽柏崎原発反対守る会連合、尾瀬を守る連絡協議会、  
43号線公害対策尼崎連合会など全国各地の住民運動の当事者による歴史的な証言を多数収録。

## 4 丁寧な解題と記事総目次を別冊に掲載

丁寧な解題と詳細な記事総目次を別冊に掲載し、利用者の便をはかった。

「環境破壊」復刻の弁  
今や地球環境の破壊が深刻化して  
いる。

1970年当時、飛鳥田一雄横浜  
市政下の公害行政担当者であり、公  
害問題研究会の一員であった私の認  
識は甘かった。「よちよち歩きの環境  
破壊誌の発育につれて環境破壊は歩  
みをとどめるにちがいない。」と編  
集後記に記した。そして、続刊十七  
年の間に多くの同志を得た。

しかし、地球温暖化による環境破  
壊の進行はそんな甘いものではなか  
った。極地の氷は解け出し南海の島  
は沈没に瀕している。南極のオゾン  
ホールは拡大の一途を辿っている。

公害先進国日本は、2008年、福  
田康夫元首相が当面先進国間の炭素  
放出削減を提唱したが、問題は先送  
りとされた。このままでは、地球の

滅亡は必至である。

環境破壊の当事者は、私ども自身  
である。特定の企業や国家だけで  
ない。私どもは原点に立ち返って、  
足元からの環境保全に努めなければ  
ならない。しかもすぐにとりかかる  
必要がある。

何をやるべきか。まず節電であ  
る。燃料消費の節減に努める必要が  
ある。それぞれの消費生活を見直し  
たい。個人個人の地道な努力の積み  
重ねが地球を救う。「私の生きている  
間は大丈夫だろう」と高をくくるべ  
きではない。環境危機は既に身近に  
迫っている。

このような時期だから、「環境破壊  
誌」の復刻には意義がある。この  
際、全国の旧同志、その縁につなが  
る人々の再読をお願いする。

助川 信彦

推薦者

# 宮本憲一

(大阪市立大学名誉教授)

## 『公害反対運動』の 第一級の資料

70年代には多くの公害関係の資料が出て  
いるが、学際的研究機関紙では『公害研  
究』(後継『環境と公害』)、公害反対の市民  
運動の手引きとしては『環境破壊』が第一  
級の資料である。この両者は国際社会科学  
評議会主催の環境破壊に関する国際シンポ  
ジウムの影響によって生まれたものであ  
る。このシンポジウムでは、環境権が基  
本的人権として初めて提起された。政府は  
いまだに法制化していないが、研究者や市  
民の基本思想となった。『環境破壊』は告  
発の書であるが、同時に環境権の実現をめ  
ざす高い理想を掲げていたのである。ここ  
に登場する筆者は当時における当該問題第  
一人者である。しかもその後の環境問題の  
理論や政策を市民にも理解できるように提  
示している啓蒙的なジャーナルである。第  
1号は国際シンポジウムの主催者であつ  
た故都留重人先生の論文で始まる。以下水  
俣病では故白木博次先生の先駆的論文をは  
じめ、その後の公害研究や市民運動の目標  
となったパイオニアの論文が目白押しで、  
史料としてはもちろんのこと、現代なお参  
考にすべき業績である。

## 船橋晴俊 歴史的経験の貴重な記録

21世紀の世界にとって、環境問題はもつ  
とも切実に取り組みが求められる問題にな  
っている。現在の課題に的確に取り組むた  
めには、歴史的経験から学ぶべきことがた  
くさんある。どのような歴史的経緯で、社  
会全体についても、個別問題についても現  
在の状態があるのか。過去の取り組みの成  
功や成果はどのようにして可能になったの  
か。失敗や行き詰まりは、どういうかたち  
で生み出されてきたのか。これからの政策  
形成や環境運動の展開にとって、そのよう  
な歴史的教訓を学ぶことは不可欠である。  
1970年代は日本の公害問題が最悪の  
状態から改善に向かった転換点であり、公  
害問題の解決を求めて、住民運動・被害者  
運動、自治体行政、政府行政、企業・財界  
がしのぎを削った時代である。雑誌『環境

破壊』には当時の各主体の努力と苦闘が凝  
縮されている。「環境破壊」というタイトルは、  
深刻な環境破壊の状況を背景にしたもので  
あり、被害への敏感さと、環境破壊を生み  
出すメカニズムに対する批判的解明への志  
向を表すものである。編集方針においては  
現場主義的視点が重視されており、公害に  
かかわった当事者からの多数の発言と記録  
が収録されている。これらの歴史的記録  
は、当時生起していた個別の問題の内在的  
な理解にとって不可欠の情報を提供するも  
のである。同時に、解決困難な新しい問題  
に直面したときに、住民やさまざまな専門  
家が、それのように立ち向かっていつ  
たのか、どのようにして前進が獲得されて  
きたのかについても貴重な教訓を読みとる  
ことができるであろう。

淡路剛久 (立教大学名誉教授)

鬼頭秀一 (星槎大学教授)

木野 茂 (元立命館大学教授)

菅井益郎 (国学院大学教授)

寺西俊一 (一橋大学名誉教授)

森まゆみ (作家)

安田常雄 (神奈川大学大学院特任教授)

### 復刻『環境破壊』の刊行予定

- 第1回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2009年1月
- 第2回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2010年1月
- 第3回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2011年5月
- 第4回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2012年10月
- 第5回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2013年11月
- 第6回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2014年11月
- 第7回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2015年10月
- 第8回配本 全4巻B5判  
定価(98,000円+税) 2016年11月

株式会社 すいれん舎

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-14-3-601  
TEL.03-5259-6060 FAX.03-5259-6070  
E-mail masato@suirensa.jp

取扱店